

鶴見俊輔における大衆文化論の視角としての「思想」

寺田 征也

本稿の目的は、鶴見俊輔における「思想」の定義を著作の内在的検討を通じて示すことである。先行研究は概して、鶴見は「大衆」に寄り添い、文化研究を通じた大衆思想の抽出と描写に主眼をおいたとするが、かれの「思想」の意味内容はどういったものであるのか。

鶴見は、プラグマティズムから学びつつ、C.L.スティーヴンソンの議論を経ることで「思想」を「信念 belief」と「態度 attitude」の二側面から捉える視角を得ていった。「信念」とは主として「ことば」を、「態度」は行為や身振りを指す。そして鶴見は、特に「態度」に注目することで、人々の私的な「思想」を取り出そうとしていた。ここには、科学性を有した哲学とは異なり、曖昧さに根づいた可謬性を含んだ私的な「思想」を把握しようとする方法論の探究があった。

本稿で得られた成果は、鶴見のプラグマティズム理解や教育論、伝記記述の方法を再考するための第一歩となる。

keywords : 鶴見俊輔、プラグマティズム、思想、大衆文化、大衆

目 次

1. はじめに
2. 「大衆思想史」という課題
3. 鶴見俊輔における「思想」の定義
 - 3-1. 上原隆による鶴見の思想観研究
 - 3-2. 「信念」と「態度」の複合としての「思想」
 - 3-3. 「思想」と哲学とのあいだ
4. むすびにかえて

1. はじめに

本稿は、戦後日本を代表する思想家、鶴見俊輔(1922-)を取り上げ、その「思想」の定義を内在的に検討し、「思想」概念がかれの大衆文化論や諸社会運動などにとっての基本的な視角となっていることを示す。

鶴見俊輔は、第二次世界大戦以前にハーバード大学に留学し、プラグマティズムを学んだ。開戦後、1943年に日米交換船にて帰国。戦後直後から姉和子らとともに『思想の科学』誌の発行・執筆および編集を行い、また京都大学などで大学教員となる一方で、「声なき声」の会や平連などの社会運動や平和運動へと参加しつつ、大衆文化についての論評を執筆するなど、幅広い仕事を行ってきている。特に、大衆文化については、

日常生活のなかでの芸術経験である「限界芸術 marginal art」を定義した「芸術の発展」([1960]1991)といった理論的な仕事から、漫才や漫画、カルタといった「遊び」を通じた「笑い」や言語に着目した作品を多く記している(注1)。

これまでの鶴見に関する研究は、これらの多様な仕事に対して、多様な切り口でかれの思想に迫ろうとしてきている。例えば原田達(2001)は、鶴見の大衆への接近法に注目する。原田によれば、鶴見は国家への抵抗主体としての大衆に自身の期待を仮託している。そのため、大衆のポジティブな面に光を当てることを通じて、「民衆の合理性を探したさうとする鶴見のひとつの希望の行為」、大衆に「希望をあたえるような社会学」の彫琢を目指した試みであった、とまとめる(原田2001:203、傍点部は原典)。

またL・オルソン(1992=1997)や吉見俊哉(2012)は、鶴見の戦前におけるアメリカ思想の摂取と、その内面化された「アメリカ」を戦後相対化していく葛藤の過程と、それに呼応するかたちでの大衆やアジアへの寄り添いに注目する。

オルソンは、鶴見を、留学中に「米国の目標や理想を吸収」(Olson 1992:113=1997:168)したものの、戦後「米国がそうした理想像から逸脱していくことに対して意義を申したてるととも

に、戦後日本社会の権力中枢への抗議も繰り返した」(Olson: 113=1997: 1968)、「典型的な知的反逆者」(a classic case of an intellectual rebel) (Olson 1992: 114=1997: 169) であると評している。そうした反逆の方法として鶴見はC.S. パースやW. ジェームズらの古典的なプラグマティズムを大きく参照し、永く傾倒しつづけていた(Olson 1992: 128-130=1997: 188-190)。鶴見は理論的領域においては大きな寄与をなしえなかったが、いわゆる『「限界」芸術と呼ぶ領域』(Olson: 150=1997: 217) についての分析では大きな仕事を残した。そこには、「土着の文化と輸入文化のあいだの緊張関係の問題」(Olson 1992: 151=1997: 218)、「伝統と近代の和解しがたいディレンマ」(Olson 1992: 151=1997: 219)、米国や大衆との間での葛藤が強く反映されていた、と結論づける。

吉見は、「東アジアにおける連続的な植民地支配体制＝冷戦体制の長期にわたる構造としての『日本＝アメリカ』の支配全体を相対化する視点」(吉見 2012: 115) としてのディスコミュニケーション論を実践的に編み上げつつ、アメリカ内でのエスニックマイノリティやアジア諸国の人々もたらす「ディスコミュニケーション」を通じて「日本人の世界の見方を多少なりとも変えていく可能性」(吉見 2012: 121) を模索していたとする。

また寺田征也(2013)は、鶴見のプラグマティズムとアナキズムといった理論および方法論についての言及と漫画論といった大衆文化論との接続性に注目しつつ、かれの思想の社会的可能性を探究している。鶴見は「大衆」と「知識人」とを区別し、前者を重視する立場を取るが、それは「大衆」のもつ「思想」が粗雑ないし曖昧といったプラグマティズムの可謬主義および国家やユートピア思想に対する抵抗といった「静かなアナキズム」を体現するものと捉えているからである。そうしたなかで、漫画はかれにとって「マチガイを強調するプラグマティズムと、論理的整合性に抗するアナキズム」(寺田 2013: 43) とが顕著にあらわれている「記号」であった。そして、そうした「記号」と反応(行為や身ぶり)に着目し、分析することを通じて時代や文化ごとの人々の「思想」や「無

関心」を描き出そうとする「記号の社会学」を構想していたのではないかと考える。

こうした諸先行研究から見てとる事ができるのは、特に原田が指摘したように、鶴見がいわゆる「知識人」ではなく、「大衆」ないし日本人の「思想」のポジティブな側面に注目していたことであり、それらの「思想」の効用や変容への着目である。「大衆」への着目は、吉見が指摘したようなマイノリティの重視と連なるだろうし、オルソンが論じた種々のディレンマのあいだからあらわれたものだろう。これらを踏まえれば、鶴見は一貫して決して主流派ではありえないものとしての大衆思想を論題とし、多種多様な対象からそれへの期待や可能性を記述して来たということが出来る。このことは、例えばかれが『アメリカ哲学』において、G.H. ミードを「大衆思想史として世界の思想史を訂正することを可能にする一つの新しい理論的わくぐみをつくった人」(鶴見 [1971] 1991: 88) と評していることとも無関係ではないだろう。それゆえ、鶴見俊輔の仕事は、人々が日々の生活上で作りあげている大衆文化(＝限界芸術)から、大衆思想の成立と変化とを把握することを通して、大衆思想史を記述しようとしてきているものと、大まかに捉えられるだろう。

しかしながら、仮にこのように鶴見の仕事を枠付けることができるとして、誰を「大衆」とし、何を「思想」とするのか。鶴見の対象設定や概念定義についての検討は、後述する上原隆(1990)によるものを除いて、あまり見られない。そこで本稿では、鶴見俊輔における「思想」という用語に着目し、その定義についての検討を行う。そして、「思想」概念が大衆文化をみていく際の重要な視角として位置づけられていることを示す。

2. 「大衆思想史」という課題

鶴見は大衆思想に関心をもち、その思想史記述の方法を模索していたと言える。その方法の一端を、前節で少し触れたように、G.H. ミードのプラグマティズムなどから見出そうとしていた。では、鶴見が大衆思想に関心をもち、その歴史を記述しなければならないとした背景には何があるのか。そこには、かれの思想史に対する見方が反映され

ている。

鶴見は、しばしば大学や論壇とは異なる学習や知識の生産の場としての「サークル」に注目し、サークル論を展開しているが、そのなかでこの思想史記述について触れている。

明治以後の日本思想史の記述が、ともすれば論壇の思想史になりやすいのは、雑誌や新聞をとおして思想をたどることが、やさしい方法だからであろう。学問をとおしての思想史は、論壇の思想史よりも、かきにくいけれども、大学や研究所の紀要とか調査報告をたどるといふ、いくらか難しいが確実な手がかりをもつ道がある。政治運動や労働運動などの運動をとおして思想史をたどる場合にも、運動の機関の残した公式の記録が手がかりとなる。(鶴見 [1976] 1991 : 93-94)

ここで示されているのは、かれの思想史観である。鶴見は、思想史とは一般的に「論壇の思想史」であると考えている。思想史記述には資料が必要であるが、それゆえにより入手や分析しやすい雑誌や新聞に記述されたものに頼りがちになる。ここでの雑誌とは、文脈から推察するに、論壇誌ということだろう。こうした論壇誌に掲載されるような仕事をしている「思想家」「知識人」といった人々を書き記したものが「思想」として主に扱われることとなり、結果として思想史とは知識人が文字によって記し残してきた思想の歴史となる。

他方で、鶴見が注目するサークルないし大衆は、そうした新聞や雑誌といった主要なマスメディアには取り上げられないし、その記録を辿ることも難しい(注2)。

そのため、いわゆる大文字の思想史からは大衆やサークルの思想史が切り捨てられてしまうことになる。こうした思想史を巡る問題に対して、鶴見は大衆の思想の変遷を捉え、残していくという方向に、自らの仕事を進めていくことになる(注3)。

ではこの「大衆」とは誰のことを指すのか。鶴見は次のように述べる。

その前にまず、大衆の思想という場合の「大衆」の定義がむずかしいが、ここでは思想的な意味における大衆ということに限定したいと思います。つまり、われわれとしては大衆が持っている思想的な生産性という概念を求めたいわけで、現代の日本の社会で、思想を追求する暇と便宜をあたえられているような知的特権階級に属していない人々を、すべて大衆と考える。具体的にいえば、大学所属の研究者、更に商業雑誌の常連の執筆者となっている作家、評論家を除き、それ以外の人々の持っている思想的な生産性ということを問題にしたい。(久野・鶴見・藤田 [1959] 2010 : 155)

端的に述べれば、鶴見が注目する「大衆」とは、大学などに所属する研究者や商業誌などで活躍する作家以外の人々全てとなる。つまり、これらの研究者や作家が鶴見における「知識人」となり、「知識人」以外が「大衆」と規定される(注4)。

鶴見のこうした「知識人」および「大衆」の見方は、かれの明治以降の大学制度に対する批判的見解と関連を持つ。例えば鶴見は、次のように述べている。

日本には明治二十(一八八七)年代以降にできた教育体系、知識人の養成ルートとはちがう大衆の知的伝統があった。なるべくそういうものを出していきたいという前提が、私にはあるんですよ。(鶴見 [1997] 2008 : 246)

鶴見は丸山眞男と自らを対比し、自身は『「大衆の知的伝統』』というのがあると思ってるんです(鶴見 [1997] 2008 : 204)と述べ、自身の仕事の前提にそうした考えがあることを強調する。しかし、明治以降の帝国大学においては、大衆の日常生活に関する考察や注目が看過され、国家を運営していくために必要な知的エリート、知識人の養成に力点が置かれる。その結果として、「大衆」と「知識人」との峻別がなされてしまい、後者に重点が置かれることによって前者が捨象されるこ

ととなった。こうした知を巡る流れに対して、「知識人」と「大衆」とが本来的には相互に結びつきうる可能性を示唆しつつ（注5）、言わば無いものとされてしまっている「大衆の知的伝統」に焦点を当てていこうというのが、鶴見の仕事における一つの課題である（注6）。「大衆」の文化が対象となり、「思想」の生産場面に注目したことの背景として、鶴見には以上の観点があったと言える。大衆思想の生産場面とは人々の日常生活であり、生活のなかで生みだされる「限界芸術」や消費される「大衆芸術」といった、いわゆる大衆文化が関心の中心となる。必ずしも文字によっては表現されえないものも含めた大衆思想史を捉え、その歴史を記述していくことを志向していた。

3. 鶴見俊輔における「思想」の定義

3-1. 上原隆による鶴見の思想観研究

以上、鶴見における「大衆思想」への着目、特に大衆思想史および「大衆の知的伝統」への強い関心と、その枠組みとしての「知識人」「大衆」との図式的区別について簡単に触れて来た。端的に述べれば、鶴見俊輔は、「知識人」養成機関としての大学もしくは商業的な論壇誌だけからは把握することが難しい「大衆」の「思想」を対象とし、「思想」が生産される大衆文化の分析からその歴史的な過程を描くことを中心的課題としてきた。

その上で、あらためて確認しなければならないのは、鶴見がいかなるものを「思想」と理解しているかということ、つまり鶴見における「思想」の定義である。そこで本節では、鶴見の著作における「思想」についての言及から、その定義を検討する。

鶴見俊輔の思想観については上原（1990）が概説しており、また本稿における鶴見の「思想」概念の検討に際しても大きく依拠しているため、ここで紹介しておく。

上原は、鶴見の「仕方」という語の使い方を考察の糸口としている。この「仕方」という語を、読み手に対してひっきりと与える「堰」の役割を果たしており、鶴見が特に着目して欲しい「場面をストップ・モーションにしたかった」がために頻繁かつ意図的に用いていると分析する（上原

1990：17）。そして、「仕方」は概して「態度」を指摘しているという（上原 1990：22）。その上で、上原は、鶴見が「思想」を「信念」と「態度」という二側面を見出していたことを指摘する。また、両者のうちで「態度」により力点を置いており、かつ、主に言語で表わされるような理論や「公」よりも行為や生活に根を持つ「私」を重視したとする（上原 1990：29）。

さらに上原は、「鶴見のこの思想観は、彼のなしとげた仕事の中で形成され、検証された仮説である」とも述べている（上原 1990：30）。つまり、「信念」と「態度」の二側面に分けつつも後者を強調するといった鶴見の思想観は、鶴見の大衆文化研究や哲学研究、伝記記述の過程のなかで形成された文化分析のための方法論であると捉えている（上原 1990：30-31）。

3-2. 「信念」と「態度」の複合としての「思想」

以上、鶴見の思想観についての先行研究として、上原による検討を見た。既述のとおり、本稿での検討はかれの仕事に影響を受けており、そのため基本的な解釈枠組みに大きな相違点は無いのであるが、本節では改めて鶴見の著作に立ち返り、内在的に検討を進めて行く。

鶴見はこの「思想」の定義について、しばしば次のように述べている。

思想といいますが、私は思想は信念と態度の複合だと思っています。

信念というのは、あした雨が振る、とかそういうものですね。民主主義はファシズムよりすぐれた形だ、これも信念でしょうね。価値判断です。

しかしそれだけではなくて、信念と結びついている態度というものがあります。信念に対する態度です。（鶴見 [1975] 1991：253）

鶴見は、上原の指摘の通り、「思想」の構成要素として二つ挙げている。一つは「信念 belief」、もう一つは「態度 attitude」である（注7）。

鶴見は、こうした「思想」を二つの部分に分けて定義する発想を、C.L.ステューヴンソンの

Ethics and Language (1944 = [1976] 1984) から得たと述べている (鶴見 [1997] 2008 : 368)。鶴見の回想によれば、*Ethics and Language* を読んだのは1948年頃であるとされているが (鶴見 [1997] 2008 : 368)、『思想の科学』の1947年11月号が初出である論文「モリスの記号論体系」([1947] 1991)において既にスティーヴンソンの著作に触れていることから (注8)、1947年以前には読了済みであったと推測できる。無論、鶴見が立脚しているプラグマティズムからもこうした「態度」の重視という発想は「論理的な系としてはあ」ったが (鶴見 [1997] 2008 : 372)、あくまでも「漠然と含まれていた」のであり (鶴見 [1997] 2008 : 373)、スティーヴンソンが決定的な役割を果たしたことを回想している。

さて、鶴見によれば、「信念」とは価値判断であり、「態度」とは信念に対する態度であるとのべる (鶴見 [1975] 1991 : 253)。もう少し言いかえると、「信念」はことばを指しており、「態度」は行為や身ぶりであると考えられる。

この点については、鶴見による具体例から見ていくことが有効である。鶴見は、戦時中の兵隊の言動についての分析から、次のように述べている。

例えば、軍隊において「若い一等水兵が『大御稜威 (天皇の威光) のもと……』とか何とか文句をつけて、中年の二等水兵を殴っている」一方で、同じ一等水兵でも部下を殴らない人もいた (鶴見 [1975] 1991 : 254)。そこには、天皇を頂く帝国によって正統性を認められた「お守り言葉」(注9)を駆使しつつ部下を殴る人物と、「お守り言葉」は用いるかもしれないが殴らない態度をとる人とに分れる。つまり、ことばによってあらわされる「信念」は同じであるかもしれないが、いかなる行為をなすかといった「態度」が異なることがありえる。こう捉えることによって、「信念」と「態度」の複合体としての「思想」は複雑さを持つものと理解できるようになる。鶴見は「『思想』は信念と態度という二側面を持つといった」そういうところからものを見るようになった、ことばには驚かなくなった、というのが戦争が私に与えた教訓です。どんなことばを聞いたって、もうことばには驚かないですよ」と述べるが (鶴見 [1975]

1991 : 254、〔〕内は引用者補足)、それは「思想」が「態度」といった言語外、発言外の部分も含めて捉えられるべきだという考えを持っているからである。

およそ正しい「信念」をことばによって表現したとしても「態度」は反する場合がありますし、また発せられる「信念」は正しさを欠くかもしれないが、行為や身ぶりを通じて示される「態度」は正しいとみなしうることもありえる。それゆえ、「思想」は「信念」のみによってだけでなく、特に「態度」への注視を含めて把握されねばならない。

ここには、言行一致だけでなく、言行不一致をも「思想」に含み込もうとし、なおかつ言行不一致が必ずしも否定されるべきではないと考えていると思われる。そして、「思想」や理論が言語によって厳密かつ正確に定義されるべきではないとするプラグマティズムの可謬主義、および権力への抵抗の源泉としてのアナキズムを重視しようとする鶴見の理論上・方法論上の傾向とも合致する (注10)。

また、それらの複合によって、権力におもねらない「大衆」による面従腹背の技法としての「思想」はあらわれうると、鶴見は考えている。例えば加太こうじが戦時中自身の「信念」を守るために「マルクスはロシア人」と言うことで特高からの査問を逃れたように (鶴見 [1997] 2008 : 509)。そして、こうした「思想」の複雑さの表現と行為への注視という視角を提供してくれるところに、「思想」を「信念」と「態度」とから考えることの一つの意義がある。

また鶴見は、「思想」について、飛行機事故により山中に取り残された人々が死体の肉を食べるべきか否かの選択を迫られた事態に言及しつつ、次のように述べる。

そういう場面での決断は、倫理の普遍原則からまっすぐに導き出されるものではない。自分自身のその場での私的信念と私的態度が、そこではたらく。(鶴見 [1999] 2010 : 27)

ここでは、「思想」の要素とされている「信念」と「態度」とに「私的」という語が付されている。その意図は、「思想」とはそれが導出される時代や状況によって普遍の原則として表明しえない場合があることを強調しているのだと考えられる。つまり、鶴見において、倫理の普遍原則は無謬性と関連づけられている。また、人間の「思想」というのは決して誤りや改訂可能性を含み持たないものと捉えるべきではない、と考えられている。このことは、かれが教育について言及している箇所からも拾い上げることができる。

家庭も学校も会社も、個人の私的信念を軽くみるようであってはいけない。しかし、私的信念を重くみるということは、その私的信念のまちがいの可能性をのこすということでもある。教師が自分でまちがいのない答もっているとする教育方針からは、まちがいの危険はあらかじめ、親心をもって、また権威をもって排除される。そのような教育に私たちはこれまでながくならされていて、それを不思議とおもわなくなっている。そのために、入学試験にあわせた学校教育制度がおっている。(鶴見 [1999] 2010 : 28)

つまり、「私的」な「信念」を含んだ「思想」は可謬性を持つ。このことは、絶対的・普遍的原理への言及や探究ではなく、個人が特定の状況や場所のなかでどのように自身の「私的」な「思想」を導出しうるか、ということへの鶴見の期待のあらわれである。

3-3. 「思想」と哲学とのあいだ

鶴見の「私的」であることへの関心は、かれのなかのいくつかの議論とも結びつく。例えば、教育論における「実感主義」への重視もそのひとつであるが、本稿の主眼はあくまで鶴見の「思想」の定義の内在的検討であるため、特に哲学と「思想」の差異について論じた文脈から検討をしていくこととする。

鶴見は哲学と「思想」についてこう述べる。

生きてゆくということは、論理の上では何の意味づけをも必要としない。しかし、実際には、人はそれぞれの仕方、自分がいきてゆくことについての納得をもっている。その納得の仕方を、思想ということにする。(鶴見 [1970] 1991 : 449)

一般的に、哲学と「思想」とは同一のことがらを指すと考えられている。どちらも「生」について考えることであるとされているが、鶴見は両者には「小さなちがい」があることをみてとる(鶴見 [1970] 1991 : 449)。すなわち、鶴見によれば、人間の生一般について哲学は問うてきたが、「思想」とは個人が自身の「生」に対してもつ「納得の仕方」としてあらわれる。生きることそれ自体に意味づけを施すのが「思想」の役割であり、それは一人一人が生活するなかで編み上げていく、いわば「私的な思想」である。

他方で哲学はこうした意味づけには与しない、というのが鶴見の考えである。なぜなら、鶴見によれば、哲学は科学だからである。「諸科学は哲学から生まれた」(鶴見 [1970] 1991 : 449)がゆえに、哲学は科学に区分されるべき学問であると、鶴見は考える。ここでの科学性は、恐らく、ものごとをより厳密に、精密に考えることを指している。そしてこのことから、一見すると類似のことを指すように思われる哲学と「思想」を区別しようとしているのである。そうした区別は、以下の記述からも理解できる。

哲学の場合、他者の思想とのつながりをつくることが重要な仕事となり、他者の思想についての知識と評価とがその中に含まれる。他者の思想の中には、科学が含まれる。したがって科学的研究との結びつきは、哲学の重要な仕事となる。(鶴見 [1970] 1991 : 461)

哲学は、鶴見によれば「他者の思想とのつながり」、いわば「諸思想」の相互連関を編み上げることが仕事となり、その結果、他者の思想について分析的に接することが必要となる。それゆえに、他者の思想についての誤解や誤読は避けられるべ

きであり、結果として哲学は科学性を含む。他方で、「思想」それ自体が私的なものでありつづけるためには「他者の思想」との関連性は必要ない。また、私的なものであればこそ、その「思想」に曖昧さや誤りが含まれていても大きな問題ではない。なぜなら「思想」とは個々人が自身の生に対して抱いている「納得の仕方」という、とうてい絶対的・最終的な答えを導き出しえないものだからである。

鶴見はこうした哲学と「思想」の区別、科学的なものとはそうではないものとの区別を通じて、「思想」があくまで私的事柄でありつづけるための論拠を提示した。つまり、私的な「思想」が可謬性を保ちうるためには、科学性を帯びた哲学とはどうしても切り離さなければならなかった。そしてこうした定義は、本稿の第二節で取り上げた「知識人」と「大衆」の区別に照らせば、「大衆」のそれに重なってくるであろうし、これこそが「大衆の知的伝統」と呼べるだろう。「思想」という概念は、鶴見の仕事において、大衆文化の分析視角として用いられていると考えることができる。

4. むすびにかえて

最後に、本稿での議論のまとめと議論、今後の課題を示しておく。

本稿は鶴見俊輔の「思想」の定義について、「知識人」「大衆」の区別がかれ自身の大衆思想史記述という課題と関連していたという文脈と関連づけて、内在的に検討してきた。「思想」を「信念」と「態度」からなるものとみなしつつ、特に後者を注視していた。加えて、「私的信念」に基づく個々人の倫理的判断や私的な思想を、科学とは異なる文脈に位置する「大衆の知的伝統」と見なそうと考えていた。

こうした思想観は、古典的プラグマティズムの骨子は「人間の思考を行為の観点から考察する」ことにあるといった教科書的理解に照らせば、鶴見が留学時代に学んだプラグマティズムに潜在的な源泉を求めることは可能であるが、自身の回想に基づけばスティーヴンソンの著作によって顕在化したのであった。加えてかれの方法論の変遷過程を見てみると、その思想観の基本形はスティー

ブンソンの著作を読んだであろう1947年前後において既に確立されていたと考えられる。そのため、鶴見における「思想」の定義は、上原が論じたような大衆文化研究などの仕事と並行して形成されて行ったのではなく、むしろその経歴の最初期において確立されていたのであり、その視角を応用した形で示されたのが鶴見の諸著作であると結論づけることができる。無論、多少の更新はあったかもしれないが、枠組みそのものには変わりがないことは、本稿第三節第二項で引いた1999年初出の著書『教育再定義への試み』での議論をみても明らかである。

ただし、このように結論づけたからといって、上原の仕事が無意味であったということではない。かれが鶴見の思想観についてまとめた1990年時点では、恐らく鶴見は自らの思想観の出典元がスティーブンソンの *Ethics and Language* にあったことを明言してはいなかっただろう。本稿で参照した鶴見の証言が掲載されているのも、1997年初出の『期待と回想』である。こうした点から、上原の著書が記された当時の資料的限界を、その後提出された著作や回想を頼りに乗り越えた学説史研究として、本稿の意義を位置づけることができる。

しかしながら、本稿では扱いきれなかった論点が多く残されているのも事実である。例えば、かれのプラグマティズム理解と関連づけてより詳述する余地は残されているし、教育論と「思想」との関連性についても踏み込んではいない。

そのなかでも大きな位置を占めるのは、伝記記述の方法論と自らの「知識人」性・科学性についての鶴見内における位置づけの検討である。鶴見は従来の思想史では描かれえない「思想」を記すために伝記という方法を重視したが、他者の思想を分析的に理解することを通してその人物の歴史を描くといった、いわば科学的・哲学的手法が入らざるを得ないのではなかったか。つまり、哲学と「思想」を区別し、前者を科学性を強調した鶴見自身が、自らの哲学の定義に従う「態度」とっていたといえるのではないだろうか。この点は、あくまで「大衆」の側に立とうとし、曖昧さを偏愛しようとした鶴見の「信念」とは切り離された、

「知識人」鶴見俊輔としての「態度」があらわれていると言えるのだろうか。

矛盾することを許容し、そこから思考を始めようとする鶴見からすれば、「知識人」性をもって「大衆」に接しようとするアンビヴァレントな自身の「態度」もまた、許容されるべきことがらとして踏まえられているのかもしれないが。

■脚注：

- (注1) 鶴見の芸術論、漫画論の検討については寺田 (2013) を参照されたい。
- (注2) 鶴見は、サークルの思想史は、「大衆個々人の思想史を書く」ことよりも難しいと述べている (鶴見 [1976] 1991: 94)。
- (注3) 鶴見の仕事を読み解く上で、かれが「知識人」と「大衆」とを図式的に区別しつつ、「大衆」の側に立とうとしていたことを念頭に置くことが必要である。この図式的区別については寺田 (2013) を参照されたい。
- (注4) 無論、この定義は当時の論壇状況を踏まえてなされているため、現代の文脈にそのまま当てはまるものではなく、また現在の文脈を持ち出して鶴見の定義を批判することは難しいだろう。例えば、鶴見の定義における「知識人」ではなくとも、現在ではインターネット上のブログや同人誌などを通じて文学作品や映画、アニメなどに関する批評活動を行っている人々は多くいる。こうした点に着目すれば、鶴見が論じた「知識人」と「大衆」の区別は、曖昧なものとなってきていると言えるだろう。他方で、鶴見は「知識人」と「大衆」との知的な相互乗り入れの重要性と必要性を論じている (鶴見 [1997] 2008: 508)。その観点から、すなわち「知識人」と「大衆」との境界が不明瞭な状況における思想史記述という課題を持ち出すことによって、鶴見の活動の枠組みがもつ今日性に焦点をあてることもできるとも考えられる。
- (注5) 「大衆」と「知識人」については、鶴見は次のようにも述べている。「大衆と知識人をそういうふうに『これは大衆』『これは知識人』と切ることに私は反対なんです。大衆文学と知識人文学と切ることにも反対だし、いつもつながりをつけたいというのが私の考え方です。概念を純粋化しないんです」(鶴見 [1997] 2008: 508)。
- (注6) もちろんこのこと以外にも、鶴見が抱えている課題についての指摘がなされている。例えば、既述のように、留学時代に内面化したアメリカとの戦後における葛藤は絶えず問われて来ており (吉見 2012)、また「自立」、「正義」と「自由」、および「エロス」という問題とそうした諸問題を考えつづけるための「親問題」「子問題」という枠組みへの言及も (黒川 2008)、鶴

見の著作には多く見られる。さらには転向や、戦争と平和といった複数の課題を、鶴見の多彩な仕事のなかに絶えず見てとることができる。

- (注7) 島田四郎による訳本において“belief”は「確信」と訳出されているが、鶴見は「信念」という訳語をあてているため、以下はそれに準ずることとする。
- (注8) 人々が物事を正当化する過程を分析する際に「正当化をするすじみちを分類することが必要だが、そのために、スティーヴンスンの『論理と言語』の中の分析を簡略化して次の項目表をつくった」と述べている箇所がある (鶴見 [1947] 1992: 234)。
- (注9) 「お守り言葉」とは、ある特定の用語を用いる事で自身の立場を正統化しうる効力を持った単語や言葉のことを指す。鶴見によれば「言葉のお守りの使用法とは、人がその住んでいる社会の権力者によって正統と認められている価値体系を代表する言葉を、特に自分の社会的・政治的立場をまもるために、自分の上にかぶせたり、自分のする仕事の上にかぶせたりすることを用いる」(鶴見 [1946] 1992: 390)。
- (注10) 鶴見のプラグマティズム、アナキズムについての概説は寺田 (2013) を参照されたい。

■文献：

- 原田達、『鶴見俊輔と希望の社会学』世界思想社、2001年。
- 久野取・鶴見俊輔・藤田省三、『戦後日本の思想』岩波現代文庫、[1959] 2010年。
- 黒川創、2008、「鶴見俊輔入門 鶴見俊輔を貫くもの」『鶴見俊輔 いつも新しい思想家』、河出書房新社、2008年12月20日、pp. 28-43。
- Olson, L, *Ambivalent Moderns*, Rowman & Littlefield, 1992. (= 黒川創・北沢恒彦・中尾ハジメ訳『アンビヴァレント・モダーンズ』、1997、新宿書房。)
- Stevenson, C. L., [1944] 1984, *Ethics and Language*, Yale University Press, [1994] 1984, (= 島田四郎訳『倫理と言語 増訂版』、[1976] 1984、内田老鶴圃。)
- 寺田征也、「鶴見俊輔の社会学的可能性——プラグマティズム・アナキズム・大衆文化——」『社会学史研究』、35号、2013年6月28日、pp. 31-46、いなほ書房。
- 鶴見俊輔、「言葉のお守りの使用法について」『鶴見俊輔集 3 記号論集』、[1946] 1992年1月15日、pp. 389-410、筑摩書房。
- 、「モリスの記号論体系」『鶴見俊輔集 3 記号論集』、[1947] 1992年1月15日、pp. 302-335、筑摩書房。
- 、「芸術の発展」『鶴見俊輔集 6 限界芸術論』、[1960] 1991年6月15日、pp. 3-60、筑摩書房。
- 、「さまざまの無関心」『鶴見俊輔集 9 方法としてのアナキズム』、[1966] 1991年8月10日 pp. 200-204、筑摩書房。
- 、「すれちがい——哲学入門以前——」『鶴見俊輔集

- 4 転向研究』、[1970] 1991年11月15日、pp. 449-461、筑摩書房。
- 、「アメリカ哲学」『鶴見俊輔集1 アメリカ哲学』、[1971] 1991年12月5日、pp. 3-270、筑摩書房。
- 、「私の地平線の上に」、『鶴見俊輔集8 私の地平線の上に』、[1975] 1991年4月15日、pp. 3-241、筑摩書房。
- 、「なぜサークルを研究するか」『鶴見俊輔集9 方法としてのアナキズム』、[1976] 1991年8月10日、pp. 93-120、筑摩書房。
- 、『期待と回想』朝日文庫、[1997] 2008年。
- 、『教育再定義への試み』岩波書店、[1999] 2010年。
- 上原隆、『「普通の人」の哲学——鶴見俊輔・態度の思想からの冒険』毎日新聞社、1990年。
- 吉見俊哉、『アメリカの越え方 和子・俊輔・良行の抵抗と越境』弘文堂、2012年。